

卷頭言

木内伸嘉

日本福音主義神学会は、発足の 1970 年から今年で 45 年を迎える。すでに、本学会誌第 41 号において「40 周年記念」号が企画され、発足にかかわった諸氏の論考とエッセイが掲載され、回顧と展望がなされた。おりおりに、自らの依って立つ根本的な前提を検証しながら進むということは必要なことである。その根幹は聖書観、とくに、「誤りなき神のことば」である。我々は、学的な深まりを期待しつつも、もしその前提そのものが修正や変更を余儀なくされるような場合には、本神学会の存在意義は消失するものと信じる。

昨年秋に、生駒で開かれた全国研究会議は、この学会の草創期の諸先輩よりも若い世代の方々が担うこととなった。そこで明らかになってきたことは、神学研究がグローバルな視座でなされるようになり、福音主義神学会創設時から 45 年の歳月が経過するうちに、「誤りなき神のことば」と言っているだけでは不十分で、その聖書解釈の実際と実践において、再考・整理すべき課題が多々出てきたということである。しかし、このような状況は、発足当時においても、形こそ違うが当時の学会も直面していたことではないかと思う。ただ、問題と課題が多いからといって真実が変わるわけではない。しかも、問題の多さに幻惑されて方向性を見失い易いことを思うとき、我々はますます原点に戻り、原点を見据える必要があると思わされる。

福音主義神学会のもう一つの側面は、この学会が 300 名を超える会員数を擁し、その殆どが牧師であり、その背後に「聖書は誤りなき神のことば」と告白する福音主義的な教会があることである。発足時の規約にも当学会は「教会の健全な成長と発展に奉仕することを目的とする」(第四条)とある。一方で、単に教会の伝統的な考え方を擁護するのではないが、信仰共同体を度外視した学

会でもない。それどころか、会員は、この背後の教会を意識して研究発表をすることが期待される。これまでこの学会誌に掲載された論文もそのような性格を帯びたものとして受けとめられてきたし、今後も、そのように受けとめられるべきものであろう。学会誌が年に一回の発行であり、紙上での議論には制限もあるが、実践面を考慮に入れた、慎重さと綿密さを兼ね備えた論考である必要を覚える。特に聖書学、神学においては、今後とも、学問をする人間自身の罪性を語る神のことばへの「恐れ」が決定的となるのではなかろうか。「……知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、……」(ルカ 11:52) とのキリストのことばをもって自戒したいものである。

要するに、「聖書は誤りなき神のことば」という告白と学問的営みと実践、これら三者が一貫しているかどうか、筋が通っているかどうかが本学会の健全さのバロメーターなのではないか。

さて、今号の特集名については、昨年の段階で、一回での特集では収まりきれないものを予測し、「福音主義神学の行くべき方向 (2) 」とさせていたことにしていた。本号で、6本の論文を揃えることができたことを感謝したい。大きく、聖書論および福音主義についての歴史的、実践的な観点からの論考と、新約学の中で広がりを見せている「パウロ研究の新しい視点」(New Perspectives on Paul) 関係の論考という風にも分けられる。藤本氏は、聖書信仰の歴史的ルーツとその背後にある哲学的・思想的前提を跡づけ、後半においてウォーフィールド型以外の考え方もあったことを強調されている。藤原氏からは、福音主義の歴史的な流れの提示とその性格の提示ののち、日本の福音派諸教会に新たな提言をしておられる。また、富田氏は、青木保憲氏の『アメリカ福音派の歴史』の貢献を評価するとともに、アメリカ福音派についての理解を5つの視点からさらに深めておられる。「パウロ研究における新しい視点」については、まず、岩上氏が、「新しい視点」とかかわる主要な釈義的問題を挙げ、その釈義的洞察を積極的に用いられることを提言しておられる。他方、橋本氏は、サン

ダース、ダン、ライトといった学者の諸説を解説しながら、ルター神学の立場から「新しい視点」の批判を展開されている。また、今回、改革主義の立場からの応答をガイ・ウォーターズ氏に依頼し、快諾を頂いていたが、その後諸事情のためかなわず、この問題に対する氏の応答論文の翻訳というかたちとなった。編集委員会は、この同じ問題を他方面から見る必要を認識している。

これらの論考が 45 号と一緒に読まれ、昨秋の会議とその延長にあるものが何であるかについて、更なる示唆を与えることになれば幸いである。

新たに提示された諸問題、諸課題と取り組む中で、当学会の趣旨がさらに堅くされ、学問と実践において深さと広がりを持つものとされることを期待したい。

(編集委員)